



近隣の鉄道ファンが自分の車両模型を走らせることもある

木次線ストロール⑩ 出雲八代駅

「精巧なジオラマと

神々が集う神話の里」

取材日は6月17日の月曜日。今年の梅雨入りは遅れていて、今朝も晴れている。麦わら帽子を被り、炎天下の歩きを覚悟した。

庄原の自宅を車で出たのが7時45分ぐらい。備後落合駅の手前を左折して、国道314号線を上ると、沿道の山林に山藤の花がまだかるうじて残っている。標高が高

いので、その分、気温が低いからだろう。

9時過ぎに出雲三成駅に到着。9時27分発の列車に乗車。車体は、木次線のシンボルカラーであるきすき色(山吹色)に柵田を象徴する緑のツートンカラー。こうしたラッピング列車が4種類ある。わたしを含めて三人乗車、先客が二

人いた。

駅を後にした列車は、やがて坑道のような小さな古いトンネルに入る。トンネルを抜けると、車窓から斐伊川がかなり下に見える。8分ほどで出雲八代駅に到着。下車したのはわたし一人。

一人の初老の男性が、ホームで出迎えてくれた。話を聞くと、駅の業務の民間委託を受けている石原久芳さんで、ミニコミ誌で木次線の駅のレポートをしていることを話すと、いろいろと教えてくれた。インバウンドが騒がれています

が、ここにも影響がありますか?」「けっこう外人さんが来ますよ。昨日の日曜日は、中国の人が多く来ましたね」

やはり月曜日は旅行者は少ないようだ。

木製の駅舎は昭和7年の開業当時のものだろう。黒光りする木のベンチ、出札所の窓口も昔のまま残っている。駅前には赤い郵便ポストと今では珍しくなったボックス型の公衆電話。

村田英二さんの『砂の器』と木次線』によると、亀高駅の父子の別れのシーンが撮影されたホームは、出雲八代駅だという。待合室の壁に、映画のスクリーン写真が掲示されている。丹波哲郎がつかんでいる木製の柵のゲートは、今でも健在である。

出雲神話にちなんだ駅の愛称は「手摩乳(てなづち)」、奇(くし)稲田姫の母神。駅の西方に鎮座する伊賀武(いがたけ)神社の境内に八重垣神社があり、素戔嗚尊(すさのおのみこと)、妻の奇稲田姫、父母神である脚摩乳(あしなづち)と手摩乳を祀っている。

駅員室には立派なジオラマがある。地元の有志などおよそ10人が3年8か月の歳月をかけて完成させた力作で、およそ2メートル四方の大きさと、駅舎やその周辺の街並みが150分の1スケールで忠実に再現されている。第二日曜



鎧竜・エウオプロケファルススの化石標本



伊賀武神社の参道の石段

日の9時から12時まで、今では引退した観光トロッコ列車の「奥出雲おろち号」の模型を走らせて、一般公開しているという。

駅の周辺を散策した。沿道の建物を見て、旧街道（湯町八川往還）の宿場町だったのだろうと推測。二階部分の高さが低い建物が多いのである。街道に面した商家は、二階部分を住居用ではなく物置として使っていたという。身分が高い人が通ったときに、二階から見下ろす不敬を避けるためだと、三次市の旧家のご主人に教えてもらった。

田村屋という和菓子屋さん。お薦めは

ありますかと尋ねて、柏餅を購入。季節ものなので、今年最後の二個だという。地元の仁多米100%のお餅は少し粘り気が強く、やさしい味だった。お土産に箱詰めめの「鉄師」。鐵（くろがね）処ならではの銘菓で、サツマイモ餡の朴訥な饅頭だ。

神社仏閣、神話の里なのでとくに神社が多い。布施幼稚園の前にある馬馳（まばせ）八幡宮に参拝。旧仁多町の布施地区に、馬馳や八代がある。参道の途中に、銀杏の青い実がたくさん落ちていて。沿道に雌雄のイチヨウが合体するように立っていて、大きな雌木が細い雄木を抱

き締めているような格好。人間の夫婦もかくあれば円満？

町中を通り過ぎて、県道25号線に出て、木次方面に10分ぐら歩いて、中世のお城や教会を彷彿させる三つの塔を持つビルが見えてきた。奥出雲多根自然博物館で、どこかで見たことがあると思ったら、「メガネの三城」の店舗のデザインだ。

館内で掲示されている新聞記事によると、メガネの三城（現在はメガネのパリミキ）の創業者である多根良尾（1905〜86年）氏が、出身地である旧仁多町佐白に建てた博物館なのである。近

くに同氏が再建した志學荒神社と八重の塔がある。境内には良尾氏の胸像があり、黄金色に輝いている。

入館料は600円。約40億年におよぶ生命の長い歴史を物語る貴重な化石を多数展示、3次元CGの解説映像も充実している。恐竜の化石の実物大のレプリカが大迫力だ。宿泊することもでき、「ドキドキ・ナイトミュージアム」の企画が楽しめる。山里と近代的なミュージ

アムの対比がまた楽しい。

県道をさらに進むと、伊賀武神社がある。解説板によると、創立年代は不明だが現本殿は1500年代に修復・造営したとの記録がある古社。明治39年（1906年）に上布施村の若杉神社、翌年に前布施村の西尾神社を合祀、合わせて九柱の神々をお祭りしている。さらに同年には境内末社として八頭（やと）の八重垣神社を移築。参道の石段も高く、長く、堂々とした佇まいである。参拝後に、賽銭箱の横にあるケースから神社のお札を頂いた。これで多くの神々の加護がある？

県道を出雲八代駅方面に少し戻って、日帰りの入浴施設、佐白温泉長者の湯で汗を流した。奇稲田姫とその両親、脚摩乳、手摩乳が住んだとされる「長者屋敷」が由来。太い原木が露出した古民家風の建物で、今は尾原ダム（さくらおろち湖）の湖底となった斐伊川の石を使ったという露天風呂が心地良い。食事もして、ゆったりした時間を過ごすことができた。

出雲八代駅に戻って、15時19分発の備後落合行きに乗車。駅の業務を委託されている石原さんから切符を購入。出雲三成駅まで190円、小銭を用意しなくても安心なのがあるがたい。今回は携帯電話のことで松江に行く用事があり、理由があつて出雲市で一泊、小旅行を大いに楽しんだ。



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「玄武の果て」

戸塚らばお 著 青文社

タイトルをすべて書くと「北辺の代官頼杏坪『玄武の果て』この儒学者、破天荒につき」。広島浅野藩きっての儒学者と評された頼杏坪が、年齢 58 歳で三次・恵蘇郡の代官、61 歳で備後国北部 4 郡の代官、73 歳で三次町奉行を歴任する。老人と呼ばれる年齢になって、教育者から最前線の行政官に転身、腐敗した藩政の暗部を苛烈に告発する。



杏坪の懐刀として大島与一という正義感溢れる若い役人が登場するのだが、物語に躍動感を与えている。幕末という時代背景もしっかり描かれて、小説としての面白さも一級品。地元での出版だが、多くの人に読んでもらいたい本である。

「南海漂泊」

岡谷公二 著 河出書房新社

「土方久功伝」のサブタイトル。「ひじかたひさかつ」と読む。第 98 号（今年 5 月発行）で紹介した「南海漂蕩」と同じ著者。南海漂蕩では中島敦、杉浦佐助と共に三人の人物が紹介されていたが、今回は彫刻家、民俗研究者としての土方久功単独。久功のパラオ滞在は 15 年、それだけ南方への想いが熱いのである。



東京の貴族社会に生まれ育った久功は、複雑な家族関係や閉塞した社会情勢に辟易して日本を脱出、南海の太陽の下、土着の人々と一緒に原始的な生活を送る。丹念に日記を書き、島の歴史や風俗を克明に記録した。その指向に共感、羨望を覚えた。

「リアリズムの宿」

つげ義春 著 双葉社

今の流行は時代小説の文庫本と異世界への転生アニメ。それなりに面白いが、つげ義春の漫画を再読するとホッとする。自分の居場所を確認できたような安心感。「李さん一家」「紅い花」「長八の宿」「もつきり屋の少女」等々、旅を題材にした作品が収載されている。作者の精神が安定していた 30 歳前後の名作ばかりで、絵柄が明かるのがありがたい。



表題作の「リアリズムの宿」は、漫画の題材を求めて東北の地を旅する作者自身が主人公。秋田県の能代と青森県の五所ガ原を結ぶ五能線、漫画にあこがれて旅したのがもう 30 年以上も前なのである。昭和は遠くなりけり。

「ぐんぐん伸びよう会」

(教室：庄原市川西町 241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ)

自分の力で 100 点を取り、勉強って楽しいって感じてみませんか？

誰でも、自分のできることからスタートすると「次もやってみよう」という気になります。「今、何年生だから、何歳だから、ここからスタートしなければいけない」と言われれば、困ってしまう生徒が多いのが実情です。当教室では、本人がスラスラできるところから始め、スモールステップで進んでいく学習法で行っています。

黒板のない教室



無料体験学習受付中！！ お気軽に問い合わせくださいね。

対象者：0歳～小学 6 年生

文学探訪

人生探訪の徒、倉田百三の流転④ なぜ「作家」の肩書きがピッタリしないのか。

音谷健郎

郷里の文豪、倉田百三は、なぜか「作家」と呼ばれることが少ないことに気づきませんか。ちなみに広辞苑で「倉田百三」とひくと「劇作家・評論家」と出てきます。新潮日本文学辞典でも同様です。

その生涯の著作を眺めると、「出家とその弟子」「俊寛」などの戯曲で脚光を浴びますが、「愛と認識との出発」をはじめ「静思」「絶対的生活」など「評論」にあてはまる著作も多いです。「劇作家」と言われる所以です。

では、作家と呼ばれる元になる「小説・評論家」はどのようなのでしょうか。今回は普段は手にすることが難しい



青年の百三（「出家とその弟子」を出した大正6年ころ）

小説を中心に時代を追って紹介してみます。

百三が小説を手がけたのは、伊吹山直子と正式に結婚し、戯曲や評論で名をなした後からです。小説は、その大正末期の長編「汐子の転心」からです。この作品を掲載した『百三選集』の凡例でも「創作に於て著者（百三のこと）は戯曲を専らにし、小説は質量共に寡少であった」と注釈を付けています。

以下、小説が書かれた順に紹介してみます。このやりかただと、百三の思索の過程が見て取れると思うからです。

最初の小説は、『倉田百三選集・全



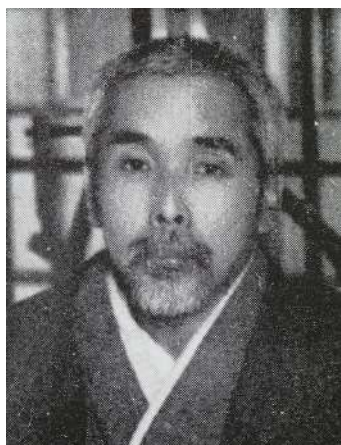
壮年の百三（大正10年30歳）

十四卷（別巻を含む）』によると約120ページの長編「汐子の転心」。「大正末期」の作品とあります。舞台は庄原の隣の三次で、実妹重子が養女に行った先の質素な家庭環境や暮らしがリアルに描かれています。巴橋、馬洗川の河原など地名も実名で出てきます。

重子を思わせる主人公の「汐子」は、古衣屋の店番をしながら、「絶え入るように」さみしく思うのです。夏祭りの夜、「佐伯」という青年に会い、惹かれ合います。ある日、佐伯や兄がいる東京へと家出をします。佐伯の下宿先を訪ねると、留守の机の上に、美しい娘の写真挟みがあったのです。

ほどなく三次の格の高い寺の住職夫人が、義父の懇願で、汐子連れ戻しにきたのでした。義父の信仰の厚さを知ることにもなるのです。

三次に戻ると義父が胃痛で寝込み、看病するなかで、義父の信仰心を理



晩年の百三（昭和17年）

解していくのでした。義父が重篤になるなか兄が、佐伯は色事の天才で、いろいろな女の人を誘惑したのだと、佐伯が友人に当てた手柄話の手紙を見せるのです。吾に戻った汐子は、住職夫人に「私、仏道を研究したいです」と告げ、夫人は「あなたは転心したのでした。本当の出発が始まりました」と、諭すのです。

百三の宗教への傾斜を如実に伝える作品になっています。

2作日の中編「冬鶯（ふゆうぐいす）」は昭和2年3月に書かれています。京都の修養道場「一灯園」での質素な生活の理想と現実が顔をのぞかせる作品です。主人公は、百三を4連想させる「山田頼介」。勉学のため兄を頼って同居する妹「ゆき子」や兄の友人「湯川」を交えて展開します。ゆき子と湯川が恋仲に成り、この恋愛をめぐる3人のそれぞれの葛藤が描かれていきます。

昭和3年の短編「小さい盗人」は、裕福な呉服屋の17歳の一人娘「もろ子」が主人公。ある時、もろ子が雀がほしいそぶりをしたら、毎日のように出入りしている7歳の「文一郎」が、「雀なら僕あげませうか」と言い出し、1時間も経たない間に「うちの雀」と言って1羽もってきたので

◆百三の主な戯曲と小説◆

- 1917(大正6)年 戯曲「出家とその弟子」
1919(大正8)年 戯曲「俊寛」
1920(大正9)年 戯曲「歌はぬ人」
1921(大正10)年 戯曲「布施太子の入山」
1922(大正11)年 戯曲「父の心配」
1925(大正14)年 戯曲「或る警察署長の死」
1926(大正15)年 戯曲「赤い靈魂」
同 小説「汐子の転心」
1927(昭和2)年 小説「冬鶯(ふゆうぐいす)」
1928(昭和3)年 小説「小さい盗人」
1929(昭和4)年 戯曲「おぎんと琴弾き」
1930(昭和5)年 小説「途なかば」
同 小説「桃と雪」
1935(昭和10)年 戯曲「祖国の娘」
同 長編小説「法の娘」
1936(昭和11年) 小説集「生きんとて」
1940(昭和15)年 自伝小説「光り合ふいのち」

す。その後、もゝ子は文一郎を抱いて横寝をするなど可愛がります。

ある日、出入りの床屋が、鳥籠を

見て「これは自家の鳥です」と告げます。文一郎の母親は、世間に顔向けが出来ないと、文一郎を激しく責め、文一郎は、もゝ子の家に来なくなりません。一ヶ月後、もゝ子は文一郎が井戸で死んだとの知らせを聞いたのでした。胸を打つ好短編で、百三がリアルな描写にもたけていると証明する作品です。

「途なかば」は、昭和5年に「婦人世界」に8回連載した作品です。百三のなかで、一番長くて約200ページ

ジ、通俗小説風な気配りもあり、一番小説らしい小説だと、私は思います。

主人公「芳子」は、会社の専務を勤めてゐる夫を持ち、自分は「閨秀作家」として注目される職業婦人なのです。ある日、突然に訪ねてきた画家の青年と意気投合し、恋仲になるのですが、芳子の熱量に青年は圧倒されます。芳子は、女の自分を対等に扱わない夫に離婚を迫るのでした。芳子は、「(家出した)ノラとは違う」ときっぱり言います。「ノラの目ざめはあたしには一と昔前」だということです。「男のすることを、女が

して何故悪い」と言うのが、芳子の言い分なのです。「女性の解放」の姿勢が貫かれています。当時としては、一歩も二歩も先を行く姿勢だったと思われまます。

短編「桃と雪」は、昭和5年2月の作品です。湘南の藤沢が舞台。主人公の「りん子」は、活動写真の弁士をしている「辰夫」と知り合い、惹かれますが辰夫には何人かの女友達がいまます。競争相手であるそんな女友達のやりとりの機微を、描いているように受け取りました。

昭和10年には、絶版で入手困難となっている「長編小説・法の娘」を出します。女性を主人公に信仰への覚醒を描いています。

最後の頃の小説と思える中編「純情」は、小説集『生きんとて』(昭和11年刊)に収録されているものですが、書いた年月は分かりません。

主人公の「藍子」は、広島で兄の友人の旧制高校生「梶村」と会っているうちに、恋心が芽ばえます。が、梶村がいきなり藍子の両手を取って引き寄せようとし、はねのけられたことから梶村は「許してください。僕を軽蔑してください」といって、藍子の前から姿を消します。

3年後、梶村からの手紙が舞い込

み、「ある未亡人との爛(ただ)れた情事が精算できずにいる」と告白。藍子は、気の弱い梶村をつれて学費を出してくれているその未亡人に手切れの談判に向かいます。無理矢理に別れ、藍子が喫茶店に勤め、「二拾五円」で生活を立て直すことになるのです。爛れた関係とは言え、2年近く学費を出して貰った未亡人に対して一方的に別れ、爽快感を持つ当時の学生のエリート意識に私は辟易します。

なお、別格として昭和15年に刊行された自伝的小説「光り合ふいのち」があります。いくらか潤色を施して、少年時代を振り返った作品です。郷里の風物と、真摯に生きようとする姿が描き込まれています。

現在、手近に読むことが出来るのは以上です。小説に関しては、年譜などからこれらの作品がほぼ全作品ではないかと思えます。なぜか殆どが女性を主人公に、対話で真実に迫る手法が使われています。

百三が昭和初期に小説から撤退したのは、対話の発展が自在な戯曲に比べ、「小説」は窮屈だと悟ったのでしょうか。あるいは、書くべき主題は書き切った、のでしょうか。

ハロー注意報⑦

——進駐軍がいた町のはなし

上海から来たマーマ

松岡初枝

私が生まれた昭和二十三年は、一月にインドのマハトマ・ガンジーが

暗殺され、三月に菊池寛、六月に太宰治がそれぞれ亡くなったたりして、何となく暗いスタートだったらしい。そんな年の七月に生まれた私だが、とても暑い夏だったという。母は私の夜泣きに悩まされ、よく夜中に外

を歩いたという。

八月になると入間川の七夕祭り、旧盆の藪入りと、実家の美容院は多忙の日々。当時は嫁に行った娘が里帰りして店にやって来た。母はゆっくり授乳する間も無く、アメリカ製の粉ミルクが昼の授乳代わりとなった。盆が過ぎた頃、母は乳腺炎を発症してしまった。思うように授乳時間が取れなかったのが災いして、外科手術するしかない程に悪化してしまった。近所の外科医の紹介で、川越にある乳腺外科で手術することになった。

八月の末、母は父に付き添われて川越の病院で日帰り手術を受けた。駅までの道で、痛さと暑さから母は道にへたり込んでしまった。ちょうど目の前に中華食堂があり、両親はその店に入った。昼食時間はとうに過ぎていたので店は空いていた。「オクサン、ドウシタネ？」片言の日本語で店の女将が話しかけてくれた。

「手術の後で妻が痛がっています。少し休ませてください。ウーロン茶でもあれば助かります」。女将は六十歳ほどの小柄な人で、心配そうに茶を運ぶと、奥の厨房から氷の入ったゴム製の氷のうを持って来た。「オクサン、コレ持つて行クネ、返サナクテイイカラ、ゲンキ出シテ」。父は思わず泣きそうだったという。戦時中、少しの間蘇州にいた父は、上海には親しみを持っていた。店に上海料理と書いてあるのを見て「マーマは上海の人ですか」と訊いてみた。「シャーンハイヨ」「私は蘇州にいたことがあります」「ハオ、シャンハイ、ソシユウノ近クヨ」。偶然とはいえ、このマーマとの出会いに両親は感謝した。それから通院する度に店に立ち寄って食事をした。最初に店に寄った時に貰った氷のうの代わりに、新品を買って返し、そのうち赤ん坊の私も連れて行ったという。

三、四歳になると、何カ月かに一度父母・弟も一緒に行くのが楽しみになっていった。「松華(しょうか)食堂」というその店は今はもう無くなってしまったが、十年程前まではマーマの息子と娘が後を継いで営業していた。前にも夫と上海租界(そかい)で食堂を営んでいたという。上海租界には、イギリス、フランス、アメリカ、日本などが租借していた所で、魔都とも言われた。アヘンやら暴力やらあり、文化的衝突もしばしばだったらしい。そんな上海に嫌気がしたマーマ夫妻は、親しくなった日本人に誘われて日本にやって来た。当初は東京で店を開いたが、戦況が悪くなった頃に川越に逃れて来たのだという。戦後間もなく夫が死に、マーマが女将になった。

そもそも松華食堂のマーマは、戦

私が覚えていいるマーマの店には、当時流行歌だった「上海帰りのリル」が流れていた。津村謙が甘い声で唄う「船を見つめていーた」という曲をすっかり覚えてしまった私は、我が家の店でよく唄っていた。当時の事を知っているお客様によくヒヤカされたものだった。「あなたは『上海帰りのリル』や『モンテンルパの夜は更けて』なんか唄ってたんだよ!」。何というマセガキだったんだろうと思うが、昭和二十年代は日本中に様々な唄がラジオやレコードから流れていたのだ。松華食堂のテーマソングのような「上海帰りのリル」は、タンゴのリズムに哀愁のあるメロディで、きっとマーマが故郷上海



江戸時代からある川越市の「時の鐘」



喜多院は川越大師の別名でも知られる



川越市連雀町にある蓮馨寺

を偲ぶにはちょうどいい曲だったの
だろう。たぶん、当時のことだから、
レコード盤が擦り切れる程かけ続け
ていたんだらうなと思う。

私達姉弟が大きくなってゆく過程
で、事ある度にマーマの食堂に行っ
た。両親と五人で川越の喜多院や蓮
馨（れんけい）寺などへお参りした。
川越は城下町で、喜多院は奈良時代
から続く天台宗の古刹、徳川家ゆか
りの寺で、蓮馨寺は広い境内でサー
カスが興行されたりしていた。寺へ
参った後には松華食堂へ寄るのが常

で、その都度マーマは「ハッチャン、
大クナツタネ、ハオ、ハオ」と言っ
てくれた。私が赤ん坊だった頃、母
を助けてくれた恩人というばかりで
なく、松華食堂の食べ物も本当にお
いしかった。当時はまだ海鮮の食材
は少なく、中国大陸でのポピュラー
な食べ物があり、上海料理なのか、
北京、四川のものなのか何でもあり
の「中華料理」だったと思う。一度
だけ家族全員で行った時には、祖父
と父はピータンや焼き豚をつまみに
老酒（ラオチュウ）を呑んだり、祖

母と母は酢豚、私達子供は焼飯やあ
んかけ焼きそば、もう思い出しても
ワクワクするような食事だった。
そんなつき合いをしていたが、マー
マの姓名などは知らないままだった。
「おとうちゃん、マーマって名前な
の？」と訊いたことがある。「シナの
言葉で母さんという意味なんだよ」
と父が言った。皆においしい物を食
べさせてくれるお母さんのような存
在というのがびつたりくる人だった。
いつも黒いシナ服、上は立ち衿で下
はカンフーズボン、髪を真中分けに
して後ろで丸めた姿で

店の客を捌いていた。
子供の目から見ても働
き者のお母さんで、我
が家の大人たちはいつ
も感謝を込めて「マー
マごちそうさま、無理
しないでね」と言って
帰って来た。
時は流れ、私が川越
女子高へ入学した日、
母と共に松華食堂へ報
告に行った。もうその
頃は本当にお婆ちゃん
といった風情の姿に
なっていて、涙を流し
て祝福してくれた。

「マーマ、おかげ様でハツエが川女に
入学できました。店と学校が近くで、
これからも宜しく」と母が言うと、「ハ
オ、ハオ、ヨカッタネ。ハッチャン
エライ！」とマーマが言い、母も私
も連られて泣いてしまった。

高校に入ると、クラブ活動や勉強
が忙しくなり、マーマの店に行くこ
ともほとんど無くなった。しばらく
してマーマが亡くなったと知り、母
と花束を持って店に行った。息子、
娘の二人は「ありがとう。マーマイ
い人だった。働く人だったよ」と言っ
た。本当にそうだ。激動の時代に遠
く上海から日本に来て、戦争を乗り
越え、皆に優しく親切だった。国の
異など感じさせない立派な人だっ
たと思う。

今も高校の同級生と「松華の五目
ワンタンやあんかけ焼きそば食べた
いネー」と話すことがある。私の思
い出の中に、赤地に金糸で「福」と
書かれた小さな壁掛けがある。高校
の入学祝いにマーマがくれた小さな
布。今はなくしてしまったが、我が
家と長い交流を続けてくれた、優し
く強い上海のマーマそのものだった
ような気がする。

今月号で、「県北どらくろあ」は100号となる。毎月発行して、休刊は一度もないので、期間にすると8年と4カ月。読者の方から、よく続いていきますねとよく言われる。自分でも、よく続けている、いや続けているとしみじみ思う。そして、半分呆れている自分がある。

第1号の創刊号を出したのが平成28年(2016年)4月。ページ数は8ページ、連載が3本ある。音谷健郎さんの「また読んでみたい本——少年少女たちへ」、自分が子供の頃に読んで感動した本を紹介している。「今月の3冊」は、わたしが面白いと思った本の紹介。3冊はちよつとしんどいかな、とも思ったが、がんばって読めとの自分への叱咤激励でもある。実際に、なかなか面白い本に出合えない時は、自然と読書量が増えることになる。

亜木冬彦の「現代御伽草子」は、地元のことを題材にしたわたしの創作掌編。ペンネームを使うことで、プロ意識を持って書こうと覚悟した。翌月の第2号からは、どらくろ俳壇がスタート。音谷さんの連載は、題材を変えながらも現在も継続、あとの3つは開始時のスタイルをほぼ維持しながら今も続けている。

前年の9月に古本屋のどら書房をオープン。実家である薬局の空き店舗を、できるだけ自分でリフォームして開店費用を少なくした。市の補助金もいただいた。経営的には成り立たないだろうと、道楽書房が店名の由来だが、ネット販売をするようになって売上も安定、ささやかだが商売として成立している。

県北では珍しい古本屋ということ

100号を振り返る

まさひろ
赤川仁洋

け。月に1句に苦吟しながらもわたしは今でも継続、100号で99句、チリツモである。近藤さんは、令和2年(2020年)3月22日に90歳で亡くなった。独自のユーモアで飄々と日常を活写した句が魅力だが「爆心地炎昼のフリーマーケット」等の鋭く時代を切り抜いた秀句も多い。遺族の方から近藤さんが投句した過去の俳誌をいただいたので、今でも

で、本好きの人が訪れてくれるようになった。朝日新聞の元記者で、大阪文学学校の講師の音谷さんもその一人で、ミニコミ誌の構想を話すと協力を快諾してくれた。俳壇の提案者は、店の最初の頃からの顧客で近藤昌平さん。句歴の長い方で、地元では指導的立場にある俳人だった。

俳壇の初回は、近藤さんの盟友である原博巳さんとわたしとで3句だけ。

どらくろ俳壇で紹介させてもらっている。いつしか、近藤さんと原さんの句集を編纂したいと願っている。

どらくろあの意味をよく訊かれる。大した理由はないので困ってしまう。「どら」はどら書房のどら、道楽のどらである。「どら書房通信」などの平凡な名前をつけたくなかったので、「民衆を導く自由の女神」の絵で有名なフランスの画家、ウジェーヌ・ドラクロワの名前を拝借。「ドラクロア」にしたのは、英語のcrowがカラスの他に動詞で「(おんどりが)鳴く、時を作る」という意味があり、crowerとして「時を作る人」とこじつけた。実際にcrowerという英語はなく、わたしの中でのイメージに過ぎない。平仮名にしたのは、気取った感じを拭いたかったから。

第3号から「県北群星伝」の連載開始、「どらくろあ版・地上の星」である。知る人ぞ知る異能の人物を紹介。第2回では、マスターズ陸上の富久正二さん(三次市在住)99歳が登場。97歳から陸上競技を始めて好記録を連発、原博巳さんの叔父ということ、原さんに橋渡しをしていただいた。その後、100歳を超えても活躍する富久さんはマスコミで何度も取り上げられて「高齢者の星」となった。2022年4月に陸上競技を引退、同年7月に105歳で逝去。

中村慎吾さんに登場してもらったのは、第7回。開店当初、ただの本好きのおじいちゃんだと思って接客していたが、店の棚にある郷土史関係の本の著者だと知って驚いた。比婆科学教育振興会の重鎮であり、庄

原市立比和自然科学博物館の名譽館長。

ライフワークの「虫と草木と人びと」は第3集まで刊行、その一部を抜粋、同じタイトルで本誌に転載させてもらった。第13号(2017年4月発行)から第93号(2023年12月発行)まで、掲載総数は81回になる。誌面に重みを付加していただいたと感謝している。近藤昌平さんと格致高校で同級生だった中村さんは、2023年1月3日に嚙下事故で91歳で急逝。残念だが、最後まで研究者として歩んだ生涯だった。



県北群星伝の取材で、多くの人の知己を得た。第14回(第28号2018年7月発行)に登場していただいた山崎允(まこと)さんは、海外旅行ツアーコンダクターやJICAのシニア海外ボランティア等での体験談を紹介する連載を第69号(2021年12月発行)から開始、現在も継続中である。

初期の頃の思い出がどんどんよみがえってくる。小部数を店頭で配布するだけでは物足りないということ、近隣の図書館で配布してもらうようにお願いした。庄原市の田園文化センター、三次市立図書館、安芸高田市立図書館。三次市の図書館は業務を民間委託しているということもあって、図書館員によるリレーエッセイを書いてもらうことが実現した。

現在は各図書館に加えて、食彩館しようばらゆめさくら、庄原北簡易郵便局、庄原自治振興センターで配布してもらっている。多くの人に読んでもらうのが理想だが、すべて手作りの小冊子なので制作に時間がかかる。印刷の早いレーザープリンターの導入を考えたが、コストが10倍以上かかり、フリーペーパーを維持できない。

市販のインクジェットプリンター2台を使って、コツコツ印刷する。毎月、300部作っているので、1冊14ページとして4200ページ印刷している勘定になる。郵送もあるので、作業を終えるのは深夜過ぎ、トラブルがあると睡眠時間もそこそこ、配布先へ配達にでかけることになる。自分の原稿や編集作業も含めて、無理をしないと発行できない……冒頭に「半分呆れている」と吐露した所以である。

つい、愚痴を書いてしまった。前向きなことも書いておこう。出版部門の立ち上げを計画している。名付けて「どら猫出版」、近藤昌平さんがうちの古本屋を「どら猫書房」と呼んでいたのが由来である。「どら書房ですよ」と訂正すると、「猫はどこに消えました?」と不思議そうな顔をされた。

現在、本誌で連載中の音谷さんの『人生探訪の徒、倉田百三の流転』が終了したら、その前の『庄原』と百三の青春』と一緒に1冊の本にまとめる予定。この告知を、1000号の誌面で書きたかった。そして、「1000号を振り返る」の続編を、次回に書かせてもらうつもりである。

まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
- ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日(2月は店内整理で全休)
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

第三部 生活に身近な項目を見る

七月一日 釜の日

地獄の釜の蓋が開く日とされ、盆の始まりの日。

七月七日 井戸さらえ

七月七日と言えば、七夕である。



この行事の流れには、中国から伝わった、牽牛星（けんぎゅうせい）と織女星（しょくじょせい）の星祭の伝説と乞巧奠（きこうでん）の行事と、もう一つ、古くからあった日本固有の七夕における水に関する民族行事である。後者の場合、七月の盆の先祖祭りにつながるもので、お盆の前に穢れを祓い清める行事であったと解釈できる。だから七夕の日には、水浴びを大切な行事とした所が多い。たとえば、髪を洗ったり、子供や牛馬に水浴びさせたり、墓掃除をしたり、井戸をさらったりする風習が各地に残されている。こうしてみると、盆と七夕の関係はひと続きの行事として考えることができる。

江戸での「井戸さらえ」は、この時期の風物詩であった。井戸の水をできるだけ出した後で、底に溜まったゴミを取り除き、井戸の内側をきれいに洗浄したそうだ。当時、江戸には井戸さいらの専門の職人も多くいて、毎年七月七日になると、江戸

中一齊に井戸掃除が行われた。

七月十五日 盂蘭盆会

旧暦七月十五日を中心に行われる先祖の霊を祀る仏事。俗に、おぼん・盆ともいう。関東地方では七月十五日に行うことが多く、関西など西日本では月遅れの八月十五日におこなうところが多い。盆の行事は、正月の行事と同様、祖霊祭の意味を持ち、重要なものであった。盆の期日は、室町時代は十四日から十六日、江戸時代は十三日から十六日であったが、近年になって十三日から十五日となった。広く一般に普及していったのは、近世になってからである。

盆の代表的な行事には、迎え火・送り火・盆踊りなどがあり、盆の十三日は、先祖代々の墓に参り、夕方には門口で「迎え火」をたき、精霊を迎え入れる。十四日や十五日は僧侶に来てもらって、お経をあげてもらう。十五日の夜は「送り火」をたき、精霊を送るのである。盆踊りは、年に一度、盆に招かれて戻ってくる精霊を迎え慰め、これを送るための踊りで十四日から十七日にかけて、寺の境内や町の広場、海岸の砂浜で行われた。

盂蘭盆とは中国で成立した盂蘭盆経をもとにしたものである。インド

から中国を経て飛鳥時代に日本へ入って来た。推古天皇の十四（六〇六）年、飛鳥の法興寺で行われたのが初めで、聖武天皇の天平五（七三三）年から官中の仏事となった。

七月十六日 藪入り

江戸時代、商家に住み込みの奉公人（丁稚奉公）たちは、毎年正月十六日と七月十六日の二日だけ休みをもらえるのが一般的だった。その休みを「藪入り」という。藪入りの日には、奉公人は主人からお仕着せの着物や小遣いをもたらって、親元に帰ったり、芝居見物などを楽しんだ。

七月二十四日 地藏盆

毎月の二十四日で、一月二十四日を「初地藏」、七月二十四日を「地藏盆」と呼ぶ。地藏菩薩の功德を講讃する法会である。地藏菩薩は釈迦仏の委託を受けて、その入滅後、弥勒菩薩の出世までの間（無仏の間）、釈迦に代わって六道（りくどう）の一切衆生の苦を除き福德を与えるといわれ、特に地獄の衆生を化導し（済度する）、代わりに苦しみを受ける菩薩とされる。俗説では、地藏は子供の成長を守り、その死後、賽の河原で苦難を救うと伝えられ、子供の守護仏として信仰されている。

ケーブルカーの走る街

マック☆ヤマザキ

引率する大阪観光学校36人の学生たちの体調はよし、昨日までのロスアンジェルスから坂の街でケーブルカーの街、ゴールデンゲートブリッジで代表されるサンフランシスコにやって来た。こんなに多くの観光客が一年中、それも世界各国から訪れてくれるなんて、インバウンド観光を促進する私はうらやましい限りである。スケッチ場所と学生たちへの連絡場所として、ケーブルカー3路線のうちのパウエル・ハイド線終点の「転車台」のそばに陣取った。

はるか向こうの丘の上にあえぎながら坂を登るケーブルカーや車の列の光景を眺めると、高低差が100mあるだけに青い空とつながって見え、高層ビルの中に映える民家などが箱庭のように見えて、表現できないほど美しい。

ケーブルカーのレールの中央に敷設された114鋼鉄線をより合わせて作られたケーブルが時速約15kmで移動しており、そのケーブルを運転

士がテコの原理を利用した装置を動かすことで車両を走行させている。バスや電車の運転手と違い、立ちっぱなしの状態で作るさまを観察している、大変な力仕事だ。等身大の棒状のハンドルでスピードをコントロールするなど緻密な作業も必要で、数十倍の競争の中から資格が与えられるということが理解できる。急こう配の坂と途中にある交差点



の光景を見た途端、「トラウマ」に襲われた。30数年前、ドイツ・メルセデスベンツの本社があるステュットガルトのホテルで、航空会社スタッフのお誘いでビアホールに招待され、深夜近くホテルに戻り、シャワーを浴びて眠りについた。「ド、ド、ド…」と地鳴りのような音。「地震? 何時だ?」と身構え、状況を把握するまで時間を要した。

上り坂の交差点に面しているホテルだったので、赤信号のたびに重量運搬車のトラックが停車し、青信号になるや鉄材等を積んだ車両が後ずさりしないようエンジンを目いっぱいふかして坂道発進するときの騒音なのだ。毛布を抱いて風呂のバスタブの中に入り、寝酒を追加して飲んだり、七転八倒しながら朝が来るのを待った。

もう一つのトラウマ……。昨日のユニバーサルスタジオでの体験で、トラムカーに乗って映画撮影スタジオ巡りの中、地下鉄区間で電気が消えた! 「ド、ド、ド…」と地鳴りのような音。暗闇の中、横揺れが激しい。「バギッ、ガシャーン!」とけたたましい騒音。明かりがごとく地下鉄構内はプラットホームが隆起して、天井を支える柱も飴のように曲がって

いた。それでもまだ地響きが続く。阪神大震災で被災した時の地鳴りと揺れが蘇ってくる。我に返って、これはトリックなのだとうやく気づいた。思えば、引率している学生たちは神戸六甲アイランドに通っていたので、1995年1月の震災を体験している。彼らのトラウマも心配だ。

街の中に、虹色の旗が飾ってある地区がある。「同性愛者」の住んでいるコミュニティだ。特に夜など、興味本意で店に入ったり、簡単に会話を交わさないようにと学生たちに注意した。「自習」されても困るので、念には念を押ししておいた。

そして、学生たちに、OJT(オン・ザ・ジョブ・トレーニング、研修旅行中講義)。「日付変更線」を現地でも再確認。日本から太平洋をまたいでハワイ、アメリカ西海岸、東海岸に向かうと一日「日付」を逆戻りする。反対に、日本に帰った時には日付を一日進めることになる。「3泊5日ハワイ旅行」とか「4泊6日アメリカ西海岸」というような泊数と日数が異なる理由である。

3月から11月の間のサマータイム期間では、アメリカ西海岸と日本の間には16時間の時差がある。

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

青高原遠くに別の大牧場

人の影無きふる里は竹の秋

今季また齡を重ね花は葉に

鳴焼しぎやきに自家製の味噌うまきかな

若葉風補助輪やつととれた日よ

夏木立美術館あり企画展

頭上注意！尻をフリフリ燕の子

五月闇強き雨降る昼さがり

下校の子らは泣き泣き走る

近藤 昌平

富久光

片岡 正人

隆愚

大楨 三代子

寺内 龍二

赤川 冬人

松岡 初枝

か。

こんなに実用的なのに、花も蕾も、清らかな美しさをたたえています。それが、泥の中から出てくるのです。「泥より出でて泥に染まらず」という言葉の通り清らかな姿が昔から人を惹きつけたのです。葉にたまった水玉まできらきらと輝いています。天上の花と言われるはずですね。

蓮の実はとても厚く、土の中で長い歲月、発芽する力を保ちます。一九五一年千葉の落合遺跡で見えられた蓮の実は、栽培されて現代に花を咲かせました。約二千年前の弥生時代のものだそうです。

大紅蓮大白蓮の夜明けかな
高浜虚子

「ツバメの子」
赤川 仁洋

どら書房の店頭で、ツバメの子がすくすく育っている。ツバメが巣を作ったのは久しぶりだ。以前は店頭ガレージの蛍光灯の端に巣作りして、毎年のように子ツバメが巣立っていたのだが、いつしかカラスに襲われるようになった。ひな鳥が姿を消して、壊れて散乱した土くれを、呆然と眺めている親鳥の姿を覚えている。

何年か同じ悲劇が続いて、蛍光灯を平板なLEDに交換したこともあって、巣作りする場所もなくなってしまう。そして、今年である。ガレージのシャッターを開けた上部に、巣作りを始めたのである。

どういふわけか、近所を縄張りにしてきたカラスの姿が消えている。小さな狭い巣に雛が五羽。面白いのは、餌やりは親鳥だけではなく四羽。二羽はサポートなのだろう。無事に巣立ってくれることを祈っている。朝、ツバメたちの歓喜の鳴き声で一日が始まるのは、とても気持ちの良いものである。

七月十二日から十六日頃を小暑の次候といつて「蓮始開」（はすはじめてひろく）の候といひます。蓮の花が咲き始める季節です。花は夜明

候のことば

「蓮始開」

隆愚

けに開き昼前にはしばみみす。蓮は古く中国から渡来したといわれています。昔は「はちす」といっていました。実の中心が蜂の巣に似ているからです。食用にする地下茎の「蓮根」以外にも、葉は包んだり盛ったりするのに使い、茎から糸も採り、若い実も食べられたそうです。また、殆んど全ての部分が薬用となると



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：8月31日(土) 9:30～11:30

テーマ：「エゴマを活用した健康生活」

講師：入江幸弘氏（エゴマ生産者）

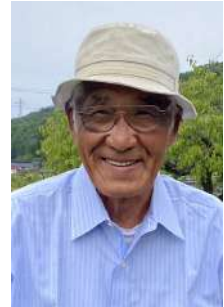
場所：生活交流館1

（備後庄原駅隣接）

参加費：500円

（学生200円、お茶菓子代込み）

申込み＆問合せ：080-3631-9125（やない）



ざけくらべって
なんじゃる？

庄原の地酒を
試してみたい
方はぜひ
ご来店ください

出演グループ、出店、フード
キッチンカーも随時募集中！
←DMにて受付中です

庄原酒販 presents 利き酒・試飲イベント

ざけくらべ

IZAYOMI SHOBARA CITY SAKE MARCHE

7.20 土曜日
7.9 火曜日

昼13時より夜19時まで
朝9時より

お酒のお話
し・ま・せ・ん・か？

comeme
市場

場所・お問い合わせ
庄原酒販有限公司

庄原市中本町1-8-1
☎(0824)72-2183

九日市ライブ

- 出演者：堀内トミオ
- 毎週水曜日 17:30～18:30 庄原駅前でストリートライブ実施中、同時にインスタライブも配信。
- 日時：7月9日(火) 11時開演（まちなか広場）
- 出演者募集！ 気軽にご応募ください。
- 担当：comeme 商会（こみみしょうかい）
- 申込フォーム <https://forms.gle/TCcDob1YS8GdSn766>
- Instagram <https://www.instagram.com/comemeshokai/>



編集後記

◇百号ですが、今は入稿の最終段階、一日発行に間に合わせることにしか頭にありません。無事発行できて身辺が落ち着いたら、少しは感慨も湧いてくるのかもしれないですね。「現代御伽草子」のスペースをまとめて、今までの簡単な経緯をまとめさせていただきました。

◇エッセイに書いた「ツバメの子」、体のいちばん小さな子ツバメが三度床に落下。その都度、軍手をはめて巣に戻してやるのですが、生存競争で兄弟に蹴落とされたのかもしれませんね。巣の下の床を確認するのが朝の日課になっています。

◇すでに夏バテ気味、今年も暑そうですが、ご自愛ください。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183
協賛: 九日市愛好会

第274回

くんちいち

ひょうばあ九日市

◇ イベント情報 ◇

九日市ライブ

★毎回開催予定、今回の出演は堀内トミオさん。エド・シーランを敬愛する比和町在住のシンガー。★出演者募集中！問い合わせは comeme 商会(080-4267-7783) メールは comemeshokai@gmail.com まで。



九日市ライブ・堀内トミオ

開演:11時 場所:まちなか広場

7月9日(火)

9:00~13:00

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
7月9日 10時~14時
「お茶会」(庄原茶道連盟)

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★カフェクラウド タピオカドリンク 100円引き
九日市特製ピタサンド 600円

★利き酒・試飲イベント「さけくらべ」(庄原酒販) 場所:旧松本額縁店
ガレージセール「comeme 市場」同時開催&高野名産のアップルパイも販売!

★アンドカフェ(比婆医院併設・ヘルシーメニューがいっぱい!)
2種類のスムージーが100円引き

★どら書房→休憩室(漫画ルーム)あります!

★あなたも自分のお店を出してみませんか?(出店者募集中!)

*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円~
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 (楽笑座内)

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

